



SET研究部

# CMC7期調 査報告

---

2023年2月  
村岡ゆりあ



# 報告の 構成

---

背景

---

目的

---

先行研究

---

方法

---

結果

---

分析・考察

---

結論

---

今後の調査課題

---

参考文献

# 背景

CMCを訪ねた時に感じた  
「生きていける雰囲気」  
はなんなのか？  
どうやって生まれているのか？

「リキッドモダニティ」  
(液状化する社会)



「生きづらさ」

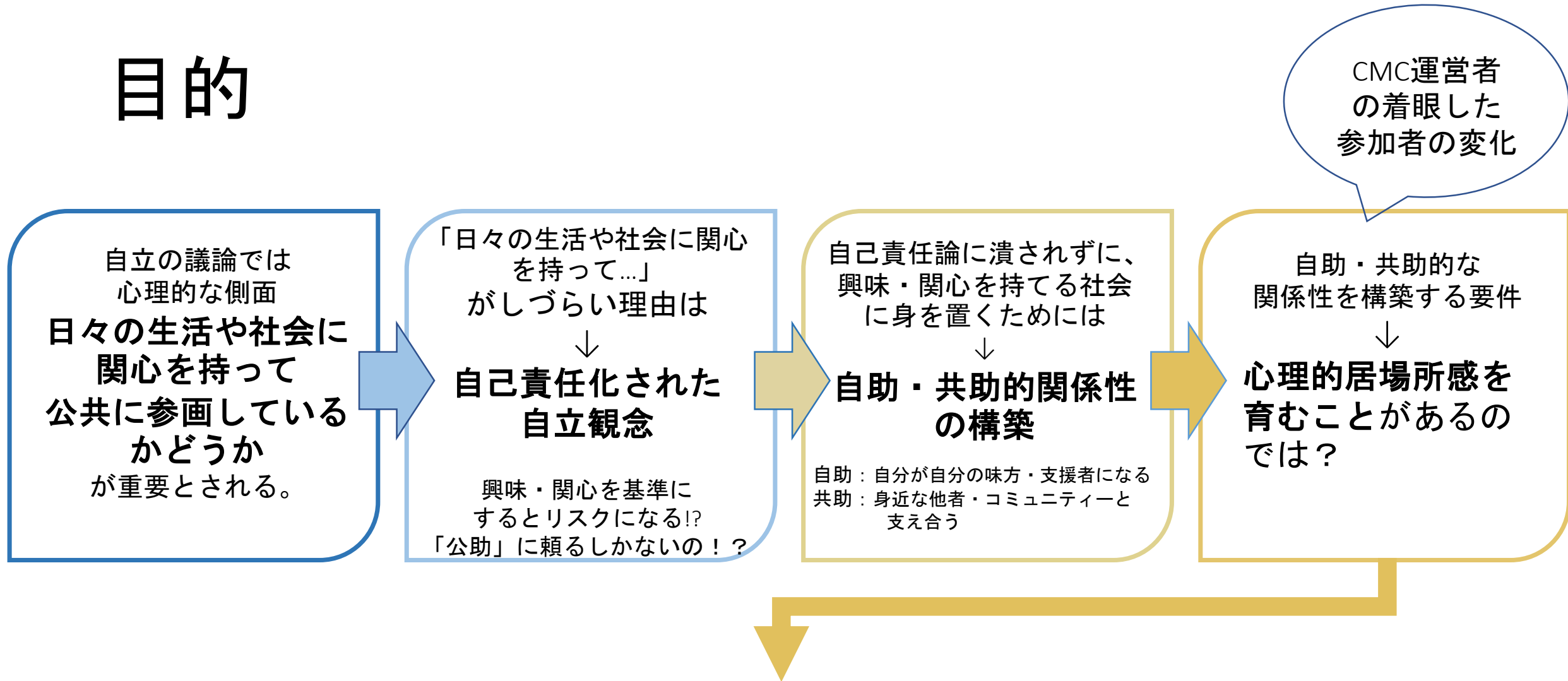
現代の若者は自由度が高まった  
半面、居場所が得づらく、また  
安定した社会生活も成立させ  
づらい状況にある。

・・・自立の難しさ

前回6期調査の課題

「参加者がプログラム参加後に  
実社会の中で**社会的自立**を  
達成していくことが可能  
なのか？」

# 目的



「心理的居場所感」の様相・変容プロセスとは？  
そしてCMCにおける何が、自立の心理的側面にどのように作用しているのか？

# 先行研究—心理的居場所感—

## 定義

こころの拠り所となる関係性、および、安心感があり、ありのままの自分が受容される場

## <4つの因子>

### 本来感

- といると...
- ありのままの自分を表現できる
- ありのままの自分で良いのだと感じる
- 自分らしくいられる
- 心から泣いたり笑ったりできる

### 役割感

- の...
- 役に立っている
- 支えになっている
- 頼りにされている
- 自分にしかできない役割がある
- ためにできることがある
- 自分のことを、かけがえのない人間なのだと感じる

### 被受容感

- に(／は)...
- 無条件に愛されている
- 私を大切にしてくれる
- 無条件に受け入れられている
- いつでも私を受け入れてくれる
- ここにいて良いのだと感じる
- 必要とされている

### 安心感

- と一緒にいると...
- ほっとする
- 安心する
- 居心地が良い
- くつろげる

# CMC7期プログラム概要

- 期間 . . . . . 2022年4月17日～2022年8月7日
- 参加者 . . . . . 9名（男4名、女5名）
- 共同生活 . . . . . 2棟のシェアハウスに4名、5名に分かれ、炊事・洗濯・掃除など共同で運営。
- プログラム内容 . . . . .
  - ・ 選択授業：リレーションシップコース、ペダゴギーコース
  - ・ 共通クラス：アクティビストクラス（活動家たちと出会い学ぶ）  
ナチュラルフードクラス（食を通じて世界とつながる）  
ネイチャーダイブクラス（自然の中で五感を使い生きること考える）
  - ・ 合宿型クラス：フォレストキャンプ（森の中で3日間キャンプする）など
- プログラム運営 . . . . . 3名のコーディネーターと、各クラス担当講師、数名のアシスタントスタッフにより、共同生活管理や授業運営。
- 参加者の特徴 . . . . . 大学生（休学中）が5名／就労経験のある若者が4名だが、経験問わず多くが就労、対人関係に対しての違和感や躓き感を抱いて入学した。

# 方法

## 対象者

- ・ インタビュー調査  
→ 9名の参加者のうち4名※
- ・ 質問紙調査A・B  
→ 9名の参加者全員

### ※対象者の選択

インタビュー調査という手法や参加者の背景情報を鑑みて、体験や感情の言語化に対する負荷がより小さく、また偏りの生じづらい組み合わせとして適当な参加者を、プログラム運営者の情報をもとに選択した。

## インタビュー調査

- ・ 3回に分けて実施  
「Ⅰ期」  
プログラム開始後1ヶ月経過時  
「Ⅱ期」  
プログラム開始後3ヶ月経過時  
「Ⅲ期」  
プログラム終了後1ヶ月経過時
- ・ Ⅰ期・Ⅱ期は広田町SET事務所、Ⅲ期はオンラインzoomにて実施
- ・ 1対1の面談
- ・ 各回約90分間。

## アンケート調査

- A：「入学前アンケート」  
「卒業時アンケート」  
プログラム前後の2回実施
  - B：「中間アンケート」  
プログラム中の月に一度、  
3回実施 ※
  - ・ オンラインGoogle Formにて個別回答。
- ※ Bは回収率が低かったため、期間は随時受付に、質問項目は紙面から聞き取りに組み込む形に変更した。

## ライフストーリー分析

- ・ 人生の物語（Life Story, narrative of life）研究において活用される質的な分析手法。やまだ（2000）によれば、人生の物語研究とは、日常生活で人々がライフ（人生、生活、生）を生きていく過程、その経験プロセスを物語る行為と、語られた物語についての研究であるとされる。
- ・ ライフストーリー分析は何かの地点においての誰かの「語り」を分析する手法であり、語られた言葉を文脈に照らして、どのような意味で語られているかを考察、解釈する。
- ・ インタビュー、文字起こし、解釈、意味化を行う。

# 結果 —Aさん—

Aさんは、休学してCMCに参加した大学生。  
広田町はCMCプログラムをきっかけに初めて訪れた。入学当時は、人といることが好きな一方で、対人恐怖感や不安感が比較的高いと回答していた。

## アンケート調査より 心理的居場所感4因子の前後比較

第一因子 本来感 (対応質問) 今の自分は「本当になりたかった自分」である  
前：あまりそう思わない ▶□▶□▶□ 後：すこしそう思う

第二因子 役割感 (対応質問) 自分がこのコミュニティに役立っていると思う  
前：4 ▶□▶□▶□ 後：5 (1「そう思わない」～6「そう思う」の段階から選択)

第三因子 被受容感 **※著しく上昇** (対応質問) 自分の事を本当に理解している人がいると感じた  
前：まったくなかった ▶□▶□▶□ 後：ほとんど毎日あった

第四因子 安心感 **※大きな上昇** (対応質問) このコミュニティの仲間といると落ち着く  
前：4 ▶□▶□▶□ 後：6 (1「そう思わない」～6「そう思う」の段階から選択)

## 因子の傾向性

### 時間

<Ⅰ期> いずれの因子にも変化は見受けられない。参加前段階からある緊張感や不信感、疲弊感が継続している。

<Ⅱ期> 安心感・被受容感・本来感が高まっていく。

<Ⅲ期> さらに安心感・被受容感・本来感が高まる。

### 空間

いずれの因子も、主に共同生活の場で語られる。

Ⅲ期になると、地域でも、存在を丸ごと肯定される被受容感・安心感を覚える経験が言語化されてくる。

※役割感に関しては該当する語が見受けられない。

### ★特徴的な語りの引用★

自分の感じていることとか立場が人と違うと、自分の方が間違ってる、悪いんじゃないかみたいな感覚が最初からデフォルトであって。今感じている辛さ苦しさも良くない、悪みたいない感じで終わっちゃうけど、でもこれも「私はこうだった、そういうことを感じて」って、自分が感じているならそうなんだみたいな。ちょっとずつ辛さも信じられるというか、それが悪いことではないっていう捉え方になってきたなって最近。<Ⅲ期>

絶対に頑張りきれない、動けないみたいな調子悪い時は、頑張ってもいずれは取れてしまうもので隠せなかった。隠せない時に皆がどう動いてくれるか、それを考える余裕もなくて。でも部屋から出てこなくても意外とみんなほっといてくれたから。良い悪いとか監視されるとかもなく、そういう時なんだね、逆に大丈夫？みたいに気をかけてくれるのを感じて、あーこのままでいいんだ、それを引け目に思う必要はないんだってだんだんと暮らしの中で感じて...<Ⅲ期>

## インタビュー調査より 心理的居場所感変容の事例

### 【安心感】

- ・ コミュニケーションの場で緊張感・委縮が緩和する<Ⅱ期>
  - ・ 特に大人数でいる場では全般的にソワソワしてしまう感覚があり疲れてしまっていた(Ⅰ期)が、緊張せず場にいられることが増えた。
- ・ 地域にいてもいいと思える<Ⅲ期>
  - ・ 地域住民がご飯を一緒に食べさせてくれたり、人生の話聞いて／聞かせてくれたりする。自身に興味を持って存在丸ごとポジティブに接してくれることで、いていいと感じられる。

### 【被受容感】 【本来感】

- ・ 1人でいることを選択ができるようになる<Ⅱ期>
  - ・ 1人で過ごしたい気持ちを自覚した時、実際に集まりの場を離れたり、その気持ちを他者に伝えることができるようになる。結果、自分らしく振る舞える時間が増える。
- ・ 他者の感情・意見と自己の相異に対する自己批判が緩和する<Ⅲ期>
  - ・ 嫌われたくないという思いから周囲に同調的になったり、同じであれない自身の個性を否定したりしていたが、自身の感性をそのまま受け止められるようになる。★
- ・ 他者とコミュニケーションがままならなくても、依然として受容してもらえると思えるようになる。<Ⅲ期>
  - ・ 調子が悪く周囲に同調したり貢献できない時でも、そのままの状態を評価したり過干渉したりせず見守ってもらう、ひいてはありのままの自分を条件なしに受け入れられる経験する。★



# 結果 — Bさん —

Bさんは、休学してCMCに参加した大学生である。  
広田町へはCMCプログラムより前にSETの別事業の参加者として入っており、SET  
コミュニティを通じた人的繋がりが既にあった。

## アンケート調査より 心理的居場所感 4 因子の前後比較

第一因子 本来感 (対応質問) 今の自分は「本当になりたかった自分」である

前: あまりそう思わない ▶□▶□▶□ 後: どちらともいえない

第二因子 役割感 (対応質問) 自分がこのコミュニティに役立っていると思う

前: 3 ▶□▶□▶□ 後: 4 (1「そう思わない」～6「そう思う」の段階から選択)

第三因子 被受容感 (対応質問) 自分の事を本当に理解している人がいると感じた

前: 週に1-2日ほどあった ▶□▶□▶□ 後: 週に3-4日ほどあった

第四因子 安心感 ※大きな上昇 (対応質問) このコミュニティの仲間といると落ち着く

前: 4 ▶□▶□▶□ 後: 6 (1「そう思わない」～6「そう思う」の段階から選択)

## 因子の傾向性

### 時間

< I 期 > 地域は馴染みがあり安心できる環境だが、共同生活は初めての人・場であり緊張感や不安感が強い。いずれの因子も変化は見受けられない。

< II 期 > 安心感・被受容感が高まっていく。伴って本来感も表れていく。

< III 期 > さらに安心感・被受容感・本来感が高まる。

### 空間

いずれの因子も、主に共同生活の場で語られる。

※役割感に関しては変容する語りが見受けられない。

## ★特徴的な語りの引用★

何か悩んでいることがある人って (自分は) 結構気になって (悩みを) 聞きたいタイプではある。でもAはそうじゃなかった。別に1人でいればどうにかなるみたいなの、そういうタイプもいるんだなって。だから聞くことが全てではないなみたいなの。Xに関しても (中略) うるさく呼びに行っただけで仲良くなるみたいなの事は、今までもやろうと思えばできたことではあるけど、何かやった事はなくて。だから、向き合うだけじゃないんだな仲良くなる方法ってっていうのは思いました。< III 期 >

結局、自分の中でご飯を作ることが最初はすごくめんどくさかったし、やりたくなかったけど、でもやりたくないといっても自分は割とやっちゃうタイプだから (中略) もう割と苦ではなくなった。 (中略) やりたいからやってるのは、楽しくなってきた< III 期 >

## インタビュー調査より 心理的居場所感変容の事例

### 【安心感】 【被受容感】

- 他者と比べて自己否定感がなくなる< II 期 >
  - 入学当初は他参加者と比べてCMCへの参加目的が明確にないという点で自己否定し、一時退学を望んだりシェアハウスを出たりしたが、他者とは異なっていると依然感じながらも、その自分でもここにいると思えるようになった。
- 他参加者が素であると感じ、打ち解けた。< II 期 >
  - 嫌われたくない思いが強く不安だったが ( I 期 )、生活の場では素でいる文化によって安心する。ただし不満を伝えることはできない。
- 他者からの評価を受け止められるようになる< III 期 >
  - 周囲から受ける評価の言葉を自分で否定していた ( II 期 ) が、III 期では言葉をそのまま受け止め自己評価を感じられるようになっている。

### 【本来感】

- 自分の個性を表現できるようになってくる< II 期 >
  - 共同生活で見える他者の異なる個性を理解していく中で自身も個性を表していいと感じる。★
- 他者の評価ではなく自身の内発的動機を基準に行動を再評価できるようになる< III 期 >
  - 共同生活における負担の偏りに対し適切な評価がされていないと不満を感じていたが、自身がやりたくてやっていると感じるようになる。★

### 【役割感】

- 共同生活の中で積極性を発揮していると感じつつも「役に立っている」「信頼されている」とは感じられない。< ~ II 期 >  
→その後は本来感として昇華する。

# 結果 —Cさん—

Cさんは、大学を修了し、新卒での就労経験を1年弱経てCMCに参加した参加者である。広田町へは学生時代にSETの別事業の参加者として入っており、元から街の人たち含む地域コミュニティと関わりがあった。

## アンケート調査より 心理的居場所感 4 因子の前後比較

第一因子 本来感 (対応質問) 今の自分は「本当になりたかった自分」である  
前: どちらともいえない ▶□▶□▶□ 後: すこしそう思う

第二因子 役割感 ※大きな上昇 (対応質問) 自分がこのコミュニティに役立っていると思う  
前: 4 ▶□▶□▶□ 後: 6 (1「そう思わない」~6「そう思う」の段階から選択)

第三因子 被受容感 ※著しく上昇 (対応質問) 自分の事を本当に理解している人がいると感じた  
前: まったくなかった ▶□▶□▶□ 後: ほとんど毎日あった

第四因子 安心感 (対応質問) このコミュニティの仲間といると落ち着く  
前: 4 ▶□▶□▶□ 後: 5 (1「そう思わない」~6「そう思う」の段階から選択)

## 因子の傾向性

### 時間・空間

<Ⅰ期>入学当初から、共同生活の場でも地域でも存在が受容され、ありのままにいられる環境づくりができていた。役割も適度にありいずれの因子も安定している。

<Ⅱ期>共同生活の場では安心感が不安定化する。対して地域では安心感・被受容感・役割感が向上していく。

<Ⅲ期>役割感・被受容感が地域社会を中心に向上する。

\* 本来感に関して変容する語りが見受けられなかった。

### ★特徴的な語りの引用★

(畑を手伝っている夫婦を夕食に招待した際) 自分が思っていた以上に、良い意味で大きく感じてくれていて。本当に感激したっていうことを言われて、それは非常に、自分がいろんな過程を経験してきたつながりが、また別のつながりとして残って、心に残ってくれたのかなみたいなのは。<Ⅱ期>

まちの中にもうちょっと入っていききたい、まちの1人になっていきたいっていう欲求があるのかもしれないですね。(中略) お互いの表情、顔を見て、微力かもしれないけど自分が力になれるっていうことを感じられることが、嬉しい、自分を満たしてくれるのかもしれない。(中略) 顔を覚えられることとか、名前を覚えられること。逆も然り、僕が顔覚えて名前を覚えてっていうことに、単純に喜びを感じる<Ⅲ期>

## インタビュー調査より 心理的居場所感変容の事例

### 【安心感】 【本来感】

- 開かれた／無理しない共同生活の文化づくりをする<Ⅰ期>
  - 居場所感を育む環境を整える中心的な働きをしていた。自身にとっても安心してありのままである環境。
- 役割期待の過多によるストレスの増大<Ⅱ期・Ⅲ期>
  - 共同生活における役割期待や負担の偏りをめぐって適切な理解や配慮の不足、価値観・文化の不一致が生じ、ストレスを感じる。安心感が低下する。

### 【被受容感】

- 地域住民と関係回復し居ていいと思える<Ⅰ期>
  - 住民との関係悪化から地域にしばらく感じ距離を置いた過去があったが、再帰したことを歓迎され、安心感を覚えた。★
- 地域住民と名前と顔を覚えあい、一員として受け入れられていく<Ⅲ期>
  - 食や労働という生活の基盤を支え合い、固有の1人として存在を大切にしあえる関係を広げていく。

### 【役割感】

- 地域住民とより積極的に緊密な関係を築く<Ⅱ期・Ⅲ期>
  - 呼びかけに応じる農作業の手伝いから、夕食会に招待する、顔を見せにいく、自身で交流機会を設定するなど、積極性の高いコミットメントになっている。自己効力感や固有性が明確になってくる。★
- 共同生活の食生活を支える<Ⅰ期>
  - ご飯を作り食べてもらうこと、喜ばれること、生活上の配慮により信頼されることに肯定感を感じている。

# 結果 —Dさん—

Dさんは、大学・大学院を修了し、いくつかの就労経験を経て参加した参加者である。広田町はCMCプログラムをきっかけに初めて訪れた。

## アンケート調査より 心理的居場所感 4 因子の前後比較

第一因子 本来感 (対応質問) 今の自分は「本当になりたかった自分」である  
前：ほとんどそう思わない ▶□▶□▶□ 後：どちらともいえない

第二因子 役割感 ※著しく上昇 (対応質問) 自分がこのコミュニティに役立っていると思う  
前：1 ▶□▶□▶□ 後：5 (1「そう思わない」～6「そう思う」の段階から選択)

第三因子 被受容感 ※著しく上昇 (対応質問) 自分の事を本当に理解している人がいると感じた  
前：まったくなかった ▶□▶□▶□ 後：週に3-4日ほどあった

第四因子 安心感 ※大きな上昇 (対応質問) このコミュニティの仲間といると落ち着く  
前：3 ▶□▶□▶□ 後：5 (1「そう思わない」～6「そう思う」の段階から選択)

## 因子の傾向性

### 時間

<Ⅰ期> 入学直後から安心感・本来感・被受容感が大きく向上し「生きてゆける」という感覚に満ちる。

<Ⅱ期> 安心感・本来感・被受容感が深まりながら、役割感が語られ始める。

<Ⅲ期> 安心感・被受容感は共同生活の中で変動しながらも本来感含めて安定して高い。役割感が深まる。

### 空間

Ⅰ期はクラス・共同生活から始まり、次第に地域、近隣地域へと広がる。大きな社会全般に対しても変容する。役割感の語りはより地域・近隣地域である。

### ★特徴的な語りの引用★

自分より若い世代のために何かやりたいという気持ちもあるけど、抗えない社会の流れみたいなものは悪い方向にいきそうだし、**未来に責任が持てない。**(中略) 広田に来たら子供たちをみんなで見守ったり、彼女たちもすぐいろいろな人の愛を受けて思いっきり花を咲かせてくれていて、明るい世界が広がっていて。**自分が考えていたものと全く違う方向で未来に対する考え方を見せられていて、こういう未来も考えられるのか、と。**<Ⅱ期>

生きる希望を持てる、生きる方法は、こっちにしかない、生き延びようとしたら。(こっちというのは) お互いを思う心、とか。その目の前の相手と良い関係を築き続けることとか。**そのためにものが循環してたりするわけ。**<Ⅲ期>

## インタビュー調査より 心理的居場所感変容の事例

### 【安心感】【被受容感】

- **安全な人・場所が増え積極的に交流機会に開かれる<Ⅰ期～>**
  - 自身の感覚や価値観を安全に共有できる場を経験し、これまでがありのままにいられるような安全な場ではなかったと気づく。各諸関係の深化と共に安全だと感じる特定の人・場が増えていき、積極的に交流機会を掴むようになる。
- **満足でいい状態に自身がある現在を肯定できるようになる<Ⅱ期>**
  - 将来の見通しに揺らぐ、今存在している自分が良い状態であることを継続すれば良いと思えるようになる。行動の選択基準ができたこと腰が軽くなり積極的に動けるようになる。
- **生きていけると希望を感じる社会を学習する<Ⅱ期>**
  - 「歩み続けられない限り自由は得られない」と生きる社会全体に絶望感を感じていたが、希望を感じる社会を体験する★

### 【本来感】

- **自身のウェルビーイングに関心を持つようになる<Ⅰ期>**
  - 自身が他者とは異なっていて良いこと、自身の感覚や価値観を中心に行動をすることを学び、自身のウェルビーイングに関心を持ったり尊重することができるようになる。
  - 個性を排した条件の羅列や能力の部分だけではない働き方を選ぶようになる<Ⅱ期>

### 【役割感】

- **社会に対する無力感があつたが、自分にもできることがあると感じるようになる<Ⅱ期>★**
  - 顔の見える範囲の社会であれば何かを支えたり役立ったりできると感じる。<Ⅱ期>
- **地域・近隣地域住民との互酬的なコミュニケーションを築いていく。**
  - 経験や食事、農作物を受け取るたびに、何らかの形でお返しを続けることで、自身のできることが組み込まれた循環の中にいられるようになる。<Ⅱ期>

# 結果

- Aさん~Dさん、  
どの因子も全体を通して向上していた。  
(因子は独立せず影響しあう)
- 特にどの因子が、いつ頃、どのように向上したかは、個別に異なっていた。

## 因子

「被受容感」「安心感」は多寡ありつつ全員共通する。  
「本来感」、「役割感」が加わるかどうかは、違いが出た。

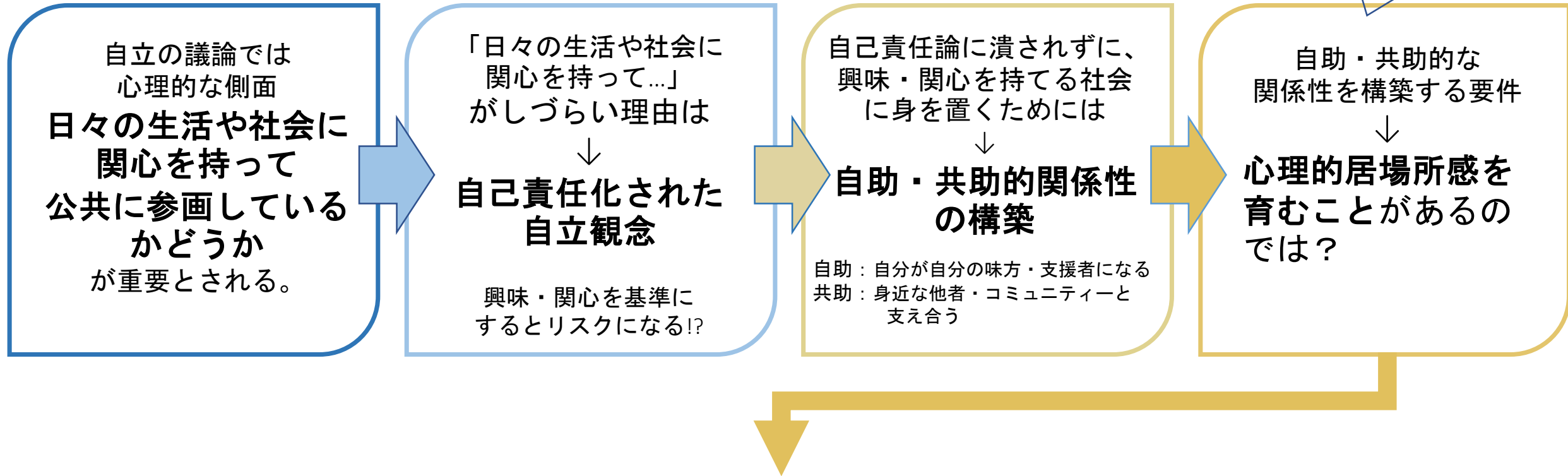
## 時間

- 安心感、被受容感、本来感に変容が見られるタイミング
  - Aさん、Bさん：Ⅱ～Ⅲ期に向上する。
  - Cさん：Ⅰ期前（入学直後）に高く保たれ、Ⅱ～Ⅲ期に変動。
  - Dさん：Ⅰ期前（入学直後）に大きく向上し、Ⅱ～Ⅲ期にも継続して向上していく。
- 役割感に変容が見られるタイミング
  - Cさん：Ⅰ期からあるものの、Ⅱ～Ⅲ期に向上。
  - Dさん：Ⅱ～Ⅲ期にかけて大きく向上。

## 空間

- 安心感、被受容感、本来感に変容が見られる場所
  - Aさん、Bさん：共同生活を主しながら、一部地域でも向上する。
  - Cさん：共同生活では後半変動するが、地域では一貫して深まっていく。
  - Dさん：クラス、共同生活から始まり、次第に地域、近隣地域へと広がる。大きな社会全般に対しても変容する。
- 役割感に変容が見られる場所
  - Cさん：共同生活で高く保ちながら、地域・近隣地域が主。
  - Dさん：地域・近隣地域が主に語られる。

# 目的



「心理的居場所感」の様相・変容プロセスとは？  
そしてCMCにおける何が、自立の心理的側面にどのように作用しているのか？

# 分析 1

- 因子の出かたの異なりから、CMCで見られる心理的居場所感を2つに分類できる。

## ① 安心感・被受容感・本来感が統合されたもの 「自助感覚」

- ・ 自分自身のありのままを受け入れる。
- ・ 自分の居場所、味方になる。
- ・ 自分らしいままでいても、他者から大切にされて良いと思う。
- ・ 社会に対する居場所感（生きる意欲）が生まれる。
- ・ 社会に対して居場所感を求めるようになる。

など

## ② 安心感・被受容感・役割感が統合されたもの 「共助感覚」

- ・ この人・場のために何かしたいと思える。
- ・ 何かすることで、何かが返ってきて、自分も助かると思う。
- ・ 自身のできることが組み込まれた循環の中にいられるようになる。
- ・ 困ったことが将来起きても頼れる人・場があると感じる。

など

- ① ② では、それぞれに語りに表れる主な空間が異なる。

① → 共同生活

② → 地域・近隣地域などの地域外社会

# 分析 2 ー どのように①②が育まれたのか？ー

(インタビューでの聞き取りから)

心理的居場所感が育まれる背景要因

心理的居場所感を生み出す場のデザイン

1. 本来性に対する、ケア的な受容がされること
2. おたがいさま的關係を築くこと
3. 物質的な「ほんもの」のコミュニケーションをとること
4. 「学び」の場であること
5. 時間的・空間的に非決定的な重層性があること

# 分析 2

## 心理的居場所感が育まれる背景要因

### 1 ■ 本来性に対する、ケア的な受容がされること

- ー 共同生活・クラスでは、ままたらなさや衝突も含む本来性を受容しあって、「自分の心地よさ」を知る。それを望むことそのものをまず肯定・受容される。
- ー 地域でも、ご飯に気兼ねなく呼んでくれる地域住民などからそのまま存在することを肯定・受容される。

### 2 ■ おたがいさま的关系を築くこと

- ー 共同生活・クラスでは、「自分の心地よさ」というものが、必ずしも自分だけで成立するわけではなく他者と相互に依存し合いながら成立していくということに気づく。(必ずしも解決はしない。)
- ー 地域でも自分の働きかけや行動によって、関係性が変わっていく。互酬性の中に組み込まれる。できることが自然と生まれる。システムのなかで半ば自動的に広がるネットワークではなく、一つ一つに自分の埋め込まれた文脈がある、顔の見えるネットワークができる。

### 3 ■ 物質的な「ほんもの」のコミュニケーションをとること

- ー 食べさせてもらう、共同生活で身体的(非言語的)コミュニケーション(察する、ハグするなど)をとる、頂き物に労働で返礼するなど。物質性は、本来性と結びついている(食べることの肯定、ただ存在することの受容)。物質的なコミュニケーション機会が多いことで、すでに存在している関係性、果たしている役割、に気づくことができる。

## 心理的な居場所感を生み出す場のデザイン

### 4 ■ 「学び」の場であること

- ー 学び場というパッケージがあって剥き出しの責任や義務から一歩引いているので気軽に動きやすく「やってみる」ができる。
- ー プログラムの中で自身の感覚や価値観を見つめる機会、コミュニケーションやコミュニティーのあり方について学ぶ機会が提供されている。特に非言語コミュニケーションの学び、対人以外の学習機会、それらを理念化しているデンマークの教育のエッセンスが取り込まれている。

### 5 ■ 時間的・空間的に非決定的な重層性があること

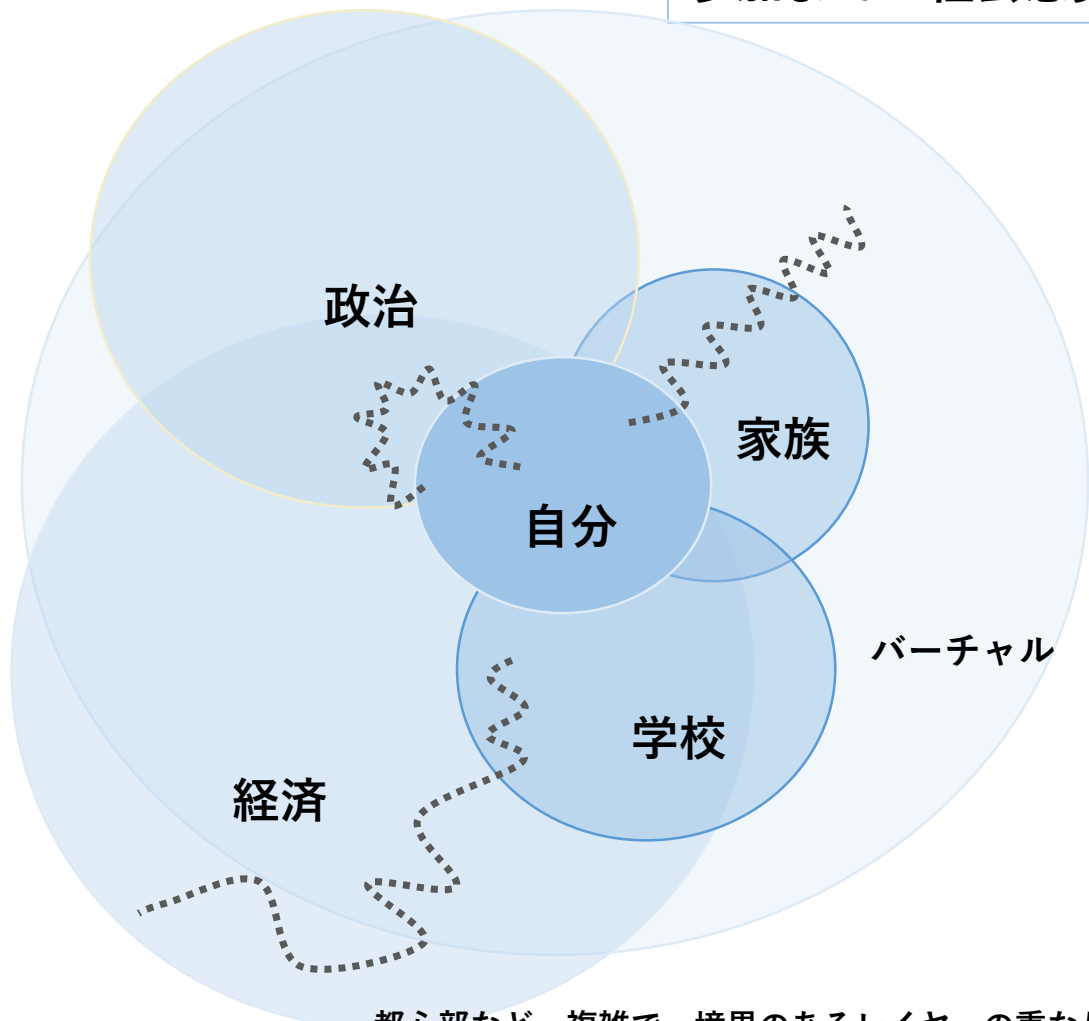
- ー プログラムにはクラスの時間、共同生活の時間、の外にも時間的な余白が大きくある。企画を立てて外出したり、1人の時間を過ごしたり、自身の主体性を起点とする出会いや発見、学びが得やすい。
- ー スケールの異なる3つの社会レイヤー：共同生活の場／地域／地域外が、滑らか&複雑すぎずに共在しているから個々に、自身の主体性の方向に適したスケール・性質の位置に動くことができる)。→次図参照
- ー また、個別に感性に従って動いた位置が異なることで、共同体の中で共有される「生きてゆける感覚」の性質にも多様性が生まれ、社会レイヤーを越境したり行き来したりする契機が連鎖する。→居心地の良いタイミングや場所に多様性があるから、誰かが見る景色を自分も見れるようになる。
- ー コーディネーターの関わり方も非決定的で、あくまで参加者の主体的な動きを起点としてアシスト役割にある。



## 分析 2 (補足図)

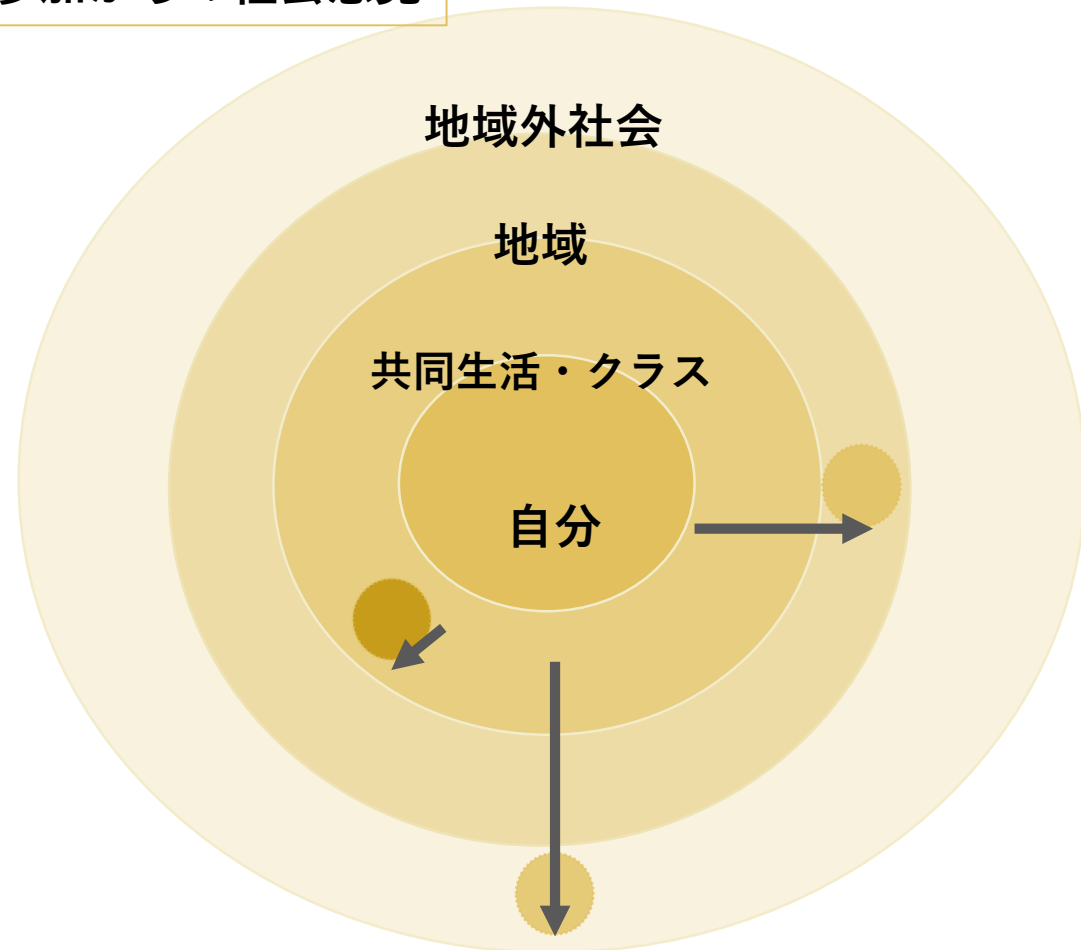
必ずしも不特定多数のネットの海の中で、より多くの人に刺さるコンテンツを作らなければ生きていけないというわけでもないんだなあとか。この人とこの人で、お互いにその関係性がある状態、信頼関係の方やっぱり大事にしたいよねと思うことでその方針は定まっていた、という安心感があった。<Dさん | II期>

参加までの社会感覚



- ・都心部など、複雑で、境界のあるレイヤーの重なりの中で、動くべき場所が感覚しづらい
- ・自分に対する関心に終始せざるを得ない場合も生む

参加からの社会感覚



- ・社会レイヤーが滑らかに、シンプルに重なっている
- ・主体的に、自身の最も心地よい場所へ動きやすい

# 分析 2

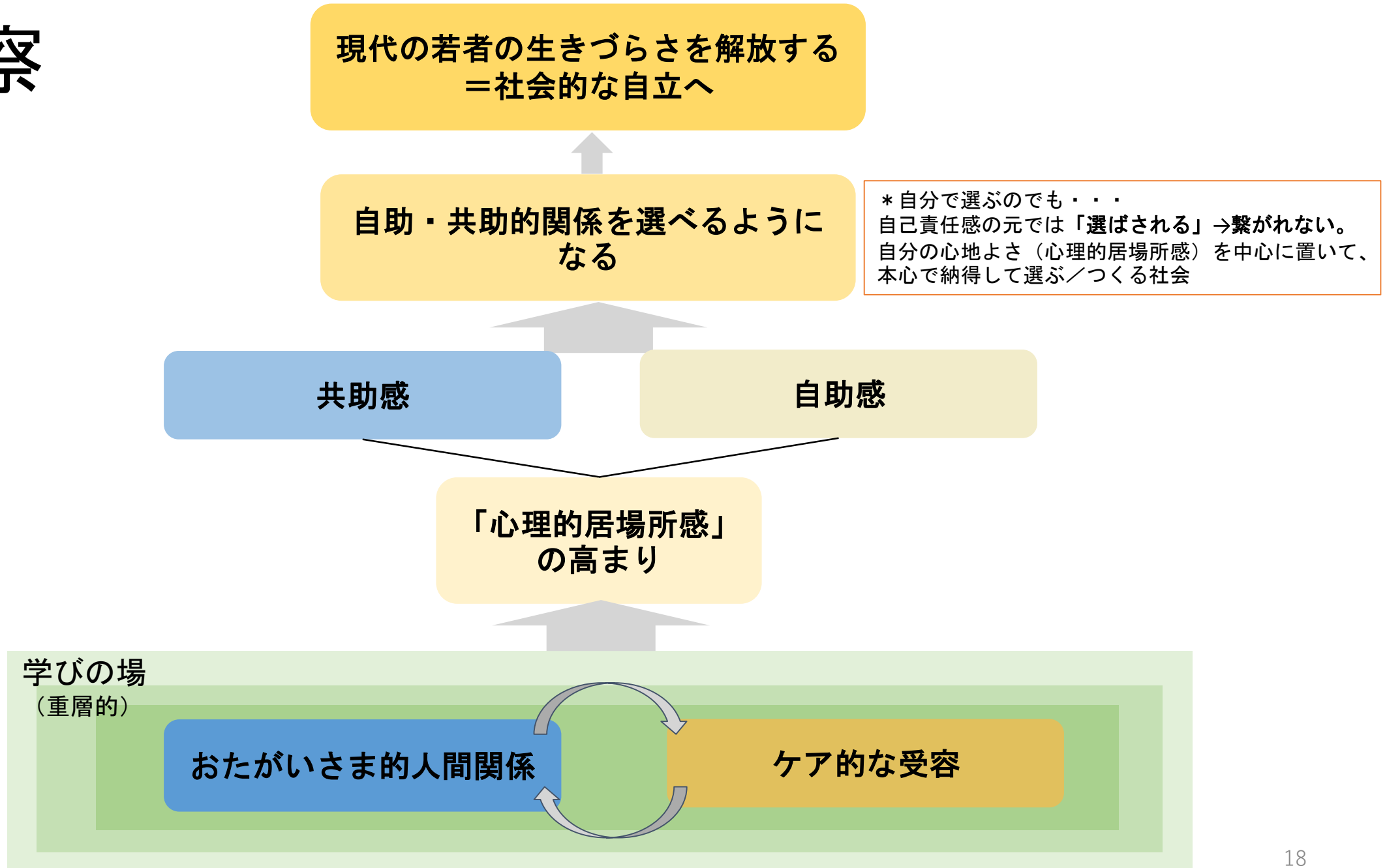
1. 本来性に対する、ケア的な受容がされること
2. おたがいさま的な関係を築くこと
3. 物質的な「ほんもの」のコミュニケーションをとること
4. 「学び」の場であること
5. 時間的・空間的に重層性があり、かつそれが非決定的であること



## まとめ

1. 自分にとっての心地よさを知る
2. 自分の心地よさと他者の心地よさが共存する方法を学ぶ
3. ほんものだと感じられるコミュニケーションで感覚的に心地よさが理解できる
4. 「やってみる」が尊重される
5. 自由に、主体的に、さまざまな種類の関係・社会を試すことができる

# 考察



# 結論

- CMCプログラムを通して、Aさん、Bさん、Cさん、Dさん、それぞれに心理的居場所感を育んでいた。  
(その内実は、ネガティブな本音も他者に示すことができるようになったり、迷っている状態の自身を受け入れられるようになったり、自分の感性に基づいて試行することで他者の喜びに繋がるような関係を活発化させようとしたり、自分らしいまま社会で生きることに希望を持てるようになったりと、異なるひとりひとり固有の変容があった。)
- その背景には、以下のような要因があった。
  1. 自分にとっての心地よさを知る
  2. 自分の心地よさと他者の心地よさが共存する方法を学ぶ
  3. ほんものだと感じられるコミュニケーションで感覚的に心地よさが理解できる
  4. 「やってみる」が尊重される
  5. 自由に、主体的に、さまざまな種類の関係・社会を試すことができる
- 結果としてCMCで育まれた心理的居場所感の様相は、「自助感覚」と「共助感覚」の2つに分類することができる。前者は主に共同生活・クラスを中心に、後者は地域・地域外社会に広げて表れている。背景要因となる学びは、いずれの空間をも行き来しながら育まれていた。
- CMCでは、共同生活・クラス社会も地域・地域外社会もあるからこそ、生きてゆくための心理的基盤＝心理的居場所感を形成するような学びが得られている。そしてそれが、自助・共助感覚の経験的学びとしてこれからの生全体を支えるものとなっている。

# 今後の調査課題・発展可能性 -テーマ-

今回調査では心理的居場所感を軸に置き、参加者の心理的変容プロセスという側面からCMC研究を行った。参加者の心理的変容プロセスを追うと、自助感覚・共助感覚などの発現が確認され、その心理的変容の構造はCMCの「自立」に関する意義に繋がるものだった。

CMC研究はまだ試行錯誤の段階にある。総合的な「CMCでは何が行われ、どんな若者が、どのような体験をし、何が起きているのか」という問いに対し多角的にデータを蓄積していくことは前提として、今後CMC研究を深化させるために学術的に考えられる今後の調査課題・発展可能性はたくさんある。今回調査の延長上に見えたものと、また新たな概念・研究領域を手がかりにするものと、両方考えられる。以下に「テーマ」「調査方法」「分析方法」の順に記していく。

## 今回調査から浮かんだ問い

◆「自助感覚」「共助感覚」として表れた心理的居場所感が、どのような自助的行動・共助的関係構築につながっているのか。

「4ヶ月間楽しかった一過性の体験」ではない、生きた学習がなされているか。今回調査では行動的変容より心理的変容に焦点があったので、具体的な行動・関係構築のレベルの実情は、部分的な語りの収集に留まった。行動ベースの指標を作成し、入口／出口調査、追跡調査の際に組み込み、プログラムで表れた心理的変容とのリンクを調査したい。

◆意図的な働きかけ（授業など）、それと自然発生的な共同生活・地域生活での学びとの連関が、どのように心理的居場所感の向上に寄与しているか。

今回調査ではインタビュー・アンケートにおいて授業について項目を設け、その回答から抽出しようとしたが、回答は回避されたり曖昧であったりと十分に得られなかった。CMCの総合的な概観を得る上でも、心理的居場所感との関連を明らかにする上でも、「地域で4カ月間共同生活をした」だけでない授業やコーディネーターの存在要素について調査が期待される。

◆物質を介したコミュニケーション（食べ物の授受、身体的共在、肉体労働など）の実態はどのようなか。

心理的居場所感が育まれる背景要因として「物質的な『ほんもの』のコミュニケーションをとること」を挙げた。参加者の語りに顕著な要因であったが、具体的にどのように（種類、頻度）なされているのか実態を捉えると説得的である。

# 今後の調査課題・発展可能性 -テーマ-

今回調査の分析を深化をする先行研究

## ◆若者の心理的自立

今回「社会的な自立」と表現したものは、青年心理学で研究される「心理的自立」と近い。概念の定義や尺度は、CMC調査にも応用できそうだ。

### 定義

「成人期において適応するために必要な心理・社会的な能力を有した状態」(高坂・戸田、2005)、  
「自分の感情や考え、行動に関して自ら主体的に管理・決定すること、かつ、それらに関して責任をもつこと」(山田、2011)

### 尺度

(高坂・戸田、2005)

「将来志向」  
「適切な対人関係」  
「価値判断・実行」  
「責任」  
「社会的視野」  
「自己統制」

(山田、2011)

「自我の確立」  
「情緒的なコントロール」  
「自己決定と責任」  
「人生への積極的態度」  
「個別性の未確立」(逆転)

## ◆若者の居場所づくり

### ／居場所を通じた移行支援

「居場所」の視点からは、CMCの移行実践・支援の側面が見えやすくなる。宮崎(2012)は、支援とは「**試行錯誤のしやすい時空間の保障**」つまり「実践を支える環境の提供」であり、居場所支援とは「もともと保持していた様々な資源を持ち込み、それらを元手に試行を重ね、あらたに資源を増やしたり積み増したりしていくことができる」場づくりであると述べている。CMC(、SET)が行っている移行実践・支援の側面また「**広田町の若者定住率が以上に高い現象**」への示唆もある。CMCをきっかけとして広田を訪れた参加者が、必ずしもSETメンバーとしての活動ではない形で地域生活をつくり始める様子は、宮崎の「**媒介的コミュニティ**」論で(移行支援にとって)重要だと強調する、あくまで当の参加者にイニシアチブがあるゆえに必然的に様々な地域資源やコミュニティに移行(依存)先が分散していく、多元的な媒介的コミュニティ／弱目的性の媒介的コミュニティと重なる。

## ◆若者のアイデンティティ

近年、青年心理学の分野では「居場所」と「自己」「アイデンティティ」などの関係が研究されている。吉川・栗村(2014)からは、大学生のアイデンティティの確立度を高めるには「**受容される居場所**」「**成長できる居場所**」「**対人コントロール**」「**状況コントロール**」が関係していること、そのため大学生には他者との親密な交流のある居場所や情動知能が求められるという報告がされている。CMC実践は、こうしたアイデンティティの確立度を高める居場所づくり・情動知能の向上という側面でも分析ができる。

# 今後の調査課題・発展可能性 - テーマ -

今回調査の分析を深化をする先行研究

## ◆若者の孤独

調査対象者の共同性について整理すると、対照的な2つの変容タイプがあった。両者とも現代の若者が抱える孤独の問題に対する処方をもつCMCで受けた事例と言える。

**自他分離タイプ**「1人になることができなかつた」→「1人になることを選べる」  
家庭など過干渉される環境で生活しており、共同生活においても初めは他者の評価や介入に対し敏感で同調的であるが、CMCで1人で過ごせる時間、自己表現の機会、パーソナルスペースを尊重される習慣などを得て、自他分離したタイプ。孤独感が生じる1つの要因は自他の癒着であるため、これは孤独対策にもなっていると言える。

**自他共生タイプ**「1人で生きていく前提」→「1人でない生き方に開かれる」  
1人として生きていくことが当然であるという自己責任の地点から始まり、他者に依存せず1人で生きていくことができるようになるための試行錯誤の先で、CMCおよび広田町や近隣地域の人々と出会ったタイプ。

——自分と違う人なので気にかかることももちろんあるだろうけど、今は誰かと過ごすことのほうが、分かち合えるものもあるし、時に付き合いながら一緒にやったりとか、1人じゃできないことも2人でいれたらできるとか、やっぱりそういうのもすごく大事なんだなあって思って。<Cさん / II期>



今後発展可能性のある研究領域

## ◆社会的連帯経済

CMC参加者は卒業後「小さな、自分の趣向に合致した無理のない足場を複数確保する」という生き方を模索・実現していく指向性がある。SETや広田町で学んでいる持続可能な生き方の軸の1つは、社会的連帯経済という形になっていくのだ。CMCの学びがどのような社会・経済のありようを実現するのか捉える上では発展可能性のある研究領域である。

## ◆ケイパビリティ

アマルティア・センの提唱したケイパビリティ・アプローチは、社会の指標として、経済的豊かさではなく、「各個人がどれだけ本質的に自由に生き方を追求できるのか、その可能性が開かれているのか」を用いるもの。「ある人が価値を見出し選択できる『機能』の集合」としての共同体、社会を目指そうとする。

CMC・SETはケイパビリティ保障の実践として評価できる。CMC参加者は「自由に生き方を選択する能力」が発現するが、それを個人の資質向上ではなく（下引用のように）協働価値の転換、根源的主体性の回復などを可能にする共同体と一体のものとして分析・理解することで、より大きな社会構想モデルとして研究できる。

協働の段階では、互いの「生きづらさ」を共通項とし、その限りで同質な他者との共感が基盤になっているものの、同時に、私的所有者としての形式的自立性に支えられた原理(=自己責任論)が影響力をもっている。したがってパットナムのいう均衡的互酬性が支配的である場合も多い。しかし協働の経験を通して活動の協働的性格、つまり協働によってのみ生じ個人には還元できない力(能力)が確認されると、それに伴い一般的互酬性の規範が生成する。この経験を経て、協働の主体としての自由を生み出す協働そのものの価値も顕在化し、協働は手段から目的に転化するが、それはセンのいうエージェント、ヌスパウムのいう実践理性と連帯に支えられた主体が実践的に立ち現れることを意味している。それを通して、望ましい人生を自ら創造する主体として生きることの価値が顕在化するとすれば、センの言う本質的自由が「人生を協働的に創造する主体としての自由」という内実を伴って実践の価値に組み込まれると言えるからである。（宮崎、2009）

# 今後の調査課題・発展可能性 -調査方法-

調査方法・分析方法については、以下を取り入れることが望ましい。

## 調査方法

### ◆より非言語的なデータを収集できる手法 (参与観察、エスノグラフィーなど)

CMCは認知的学習だけでなく非認知的学習も大いに重視しているため、実際には重要な体験や行動変容をしても、必ずしも語り(意識)に上りやすくはない。(参加者には、言語化を意図的に避けていたり、言語化を求められることに抵抗を感じたりする場合さえ多く見られる。)また、CMCで行われていることを読み解く際には、運営者の「敢えて設計しない」「敢えて干渉しない」という教育的意図など、むしろ意識化されていない、いわば「見えない」要素を「見る」必要がある。今回調査ではインタビュー逐語録やアンケートという言語データのみを扱った結果、本来のCMCの取り組みに比して分析できる範囲が極めて限られてしまった印象がある。参加者の行動記録など非言語的データを収集することが望ましい。

### ◆プログラム終了後数ヶ月～数年の追跡

CMCが掲げる「持続可能な生き方」の内実(今回調査では「自立」と表現した点)、つまりCMCを経ることで実際どのように「持続的な生」が実現していくのかは、プログラム終了後を追わないと見えない。CMCは全体を通して広田町および共同生活という環境要因に強く影響されている。「プログラム期間内に見られた変容がCMCの環境要因に依存する「適応的な変容なのか、それとも環境を移しても持続するより根本的で普遍性の高い「学習」的な変容なのか」を調べる必要がある。7期を追跡するならば、今回調査では「心理的居場所感」が「自立」の基礎的要件となっていることを仮定したが、プログラム終了後一定期間経過後に再調査し、その時点での自立状態とその要件を見て、今回「心理的居場所感」と捉えたものがどのような形に再構成されている／いないかを照合することで、その仮説が立証されるかどうかを調べる。

## 調査対象

### ◆授業の様子、授業内で表れた発言や議論の資料、授業のフィードバックなど

授業はプログラムの重要要素でありながら、インタビュー・アンケートにおいて授業について項目を設けても、回答は回避されたり曖昧であったりする場合が多い。

### ◆参加者とは別の立場でCMCに関わっている人(コーディネーターなど)

参加者特有の言語化の困難に加え、参加者は変容の渦中にいるがためにプログラムを通時的・包括的に鳥瞰しづらい。今回調査では、CMC全体の包括的な分析が、そうした参加者の主観的かつ部分的な語りに基づいていたため、導き出された結論もく個別具体(包括抽象)のあいだの薄いものとなってしまった。よって、参加者の変容を客観的に見ることのできる立場から、通時的・包括的な視点の補完が望まれる。



# 今後の調査課題・発展可能性 -分析方法-

## 分析方法

### ◆ナラティブアプローチの活用

ナラティブアプローチ（対話的構築主義）とは、ライフストーリー調査の中でも「いまここ、で生成されるものとしての特性を加味する立場」。今回調査では、当初これを採用していた。実際インタビューで参加者から語られる出来事や経験には、心理的居場所感という切り口では焦点が当てられないものの、CMC調査としては掘り下げられるべき新たなテーマ可能性が多くあった。（次のテーマの発展可能性でそのいくつかは触れる。）そこで調査を進めながら新たに複数のテーマを焦点化してみたが、関連するデータを体系的に収集しなおしたり、調査結果を各テーマごとにまとめていく段階で調査キャパシティを超えた。結果、分析の手がかりは「心理的居場所感」という概念に絞ることとなった。ナラティブアプローチは常に生成される可能性に対応し論の再構築を繰り返すため、調査者の対話的構築能力や分析力への依存、裁く情報量が極めて大きくなる。しかし、調査者が対象者の変容プロセスを共にし、インタビューという形で言語化を促し、共に学びを形成していくCMC調査においては、ナラティブアプローチのライフストーリー調査を置いて、その本質に迫ることのできる手法はそう無いのではないか。今後、CMC研究の蓄積と共に、こうした手法をもって、総合的かつ具体的な、よりリアリティに肉薄する調査・分析ができるようになることを期待する。

### ◆差異のある事例との相対化

運営者の「敢えて設計しない」「敢えて干渉しない」という無意図性や、参加者間の意識化されない習慣的コミュニケーションによって引き出されている学びが確かにあるように思われる。しかし「見えない」要素の因果関係を緻密に見ることは対象内部だけを見る限り困難なので、相対化できる事例との比較分析が望まれる。例えば「（広田町に継続居住していつつも）プログラムとしては場が設定されていない状態」、対極的に「カリキュラムやスタッフの役割などプログラム設計が綿密に組み込まれている状態」など、CMCと同一線上にありながらも異なる状況、異なるアプローチがある学びの場について、参照しながら分析を当てることができればまた理論化された「学びの場論」を参照にすることも有効だろう。

## 分析対象

◆（特に、参与観察やエスノグラフィー、ナラティブアプローチを手法とする場合）調査者自身のフィールドでの立ち振る舞い方、調査対象者との関係性など。

今回調査では、現地居住メンバーではない外部の研究部員が調査を実施した。調査者の指向性や期待が露出することで対象者の本来的語りや奪われることのないよう、また調査者が参加者間の特定の間関係性を干渉したりしないように、調査者は適度な距離を保つよう留意しながら場に関与した。とはいえ、CMCでは「本来感や安心感を感じられる場」がつけられているのであり、自己開示をする対象者にとっては見知らぬ調査者であってもそうした学びの場にいる限りは「ありのままに話せる安心できる存在」である必要がある。よって今回調査者も参加者と同様に主に動機や背景について自己開示をし、信頼関係を取り結ぶことになった。今後より長い時間、より多くの場面で対象者と場に共在する調査手法をとった場合には、調査者がいかに対象者に影響した可能性があるのか／ないのかを、1つの因子として加味する必要がある。

# 参考文献

## ■現代社会、若者の自立

- ・ 宮本みち子 (2012) 「成人期への移行モデルの転換と若者政策」人口問題研究、第68巻1号、32-53
- ・ 宮本みち子 (2015) 「若者の移行期政策と社会学の可能性-『フリーター』『ニート』から『社会的排除』へ」社会学評論、第66号(2)、204-223
- ・ 内閣府「若者の包括的な自立支援方策に関する検討会報告」

## ■心理的居場所感

- ・ 則定百合子「青年版心理的居場所感尺度の作成」神戸学院大学
- ・ 岡本、古川、増田、上手 (2020) 「居場所感の背景要因の検討—集団適応に関連する欲求及び行動に注目して—」広島大学心理学研究、第20号

## ■調査分析方法

- ・ 大久保孝治(2008)『ライフストーリー分析』学文社
- ・ 桜井厚・小林多寿子(2005)『ライフストーリー・インタビュー 質的研究入門』せりか書房
- ・ ジェイムズ・ホルスタイン(2004)『アクティヴ・インタビュー 相互行為として社会調査』せりか書房
- ・ 波平恵美子(2010)『質的研究の方法 いのちの〈現場〉を読みとく』春秋社
- ・ やまだようこ (2000) 『人生を物語る 生成のライフストーリー』ミネルヴァ書房

## ■今後の発展可能性

- ・ 吉川満典・粟村昭子 (2013) 「大学生におけるアイデンティティの確立について—心理的居場所との関係性から—」『総合福祉科学研究』第5号、41-50
- ・ 高坂康雅 (2018年) 「大学生における心理的自立と経済的自立・社会観との関連」『和光大学現代人間学部紀要』、第11号、123
- ・ 藤井敦史 (2022) 『地域で社会のつながりをつくり直す社会的連帯経済』彩流社
- ・ 宮崎隆志 (2012) 「ソーシャル・キャピタル論の批判的再構成の課題」松田武雄『社会教育・生涯学習の再編とソーシャル・キャピタル』大学教育出版、24-47
- ・ 宮崎隆志 (2009) 「ソーシャル・キャピタルとケイパビリティ:移行過程支援との関連で」『社会教育研究』、第27号、15-30
- ・ 山田 裕子(2011)「大学生の心理的自立の要因ならびに適応との関連」『青年心理学研究』、第23号、1-18